看護師基礎教育課程における「終活」学習の導入

Try of “Shukatsu” workshop in the nursing training course

森　佳奈枝[1]，矢野　明宏[2]

1　デジタルハリウッド大学　メディアサイエンス研究所　研究員

2　東京通信大学　人間福祉学部　准教授

年 報 35（抄 録）

2024年３月 発行

一般財団法人 山口老年総合研究所

年　報　　３５　号

発　　行	令和６（２０２４）年 ３ 月
発 行 人	頴原　　健（理 事 長）
編集責任者	瓜生　達哉（事務局長）
発 行 所	一 般 財 団 法 人　山 口 老 年 総 合 研 究 所
	〒751－0833　下関市武久町二丁目53番８号 武久病院内
	TEL：０８３－２５２－２１２４（代表）
	URL：http://www.tip.ne.jp/rounenkenkyu/
印 刷 所	泉　菊　印　刷　株　式　会　社
	〒752－0927　下 関 市 長 府 扇 町 ８ 番 48 号
	TEL：０８３－２４８－３５５３（代表）

本論文および年報35掲載の論文は、本研究所ホームページ
http://www.tip.ne.jp/rounenkenkyu/nenpou/からPDF媒体によるダウンロードが可能です。

看護師基礎教育課程における「終活」学習の導入

Try of “Shukatsu” workshop in the nursing training course

森　佳奈枝[1]，矢野　明宏[2]

1　デジタルハリウッド大学　メディアサイエンス研究所　研究員

2　東京通信大学　人間福祉学部　准教授

1．本研究の目的・背景

本研究は、看護職、なかでも看護師基礎教育課程の講義・演習科目において、臨地実習以外の機会に「現場」、周囲の地域・社会、そのなかに生きる人々や看護師をはじめとする専門職・機関のリアルをとらえ、感じ、学ぶことができるプログラムおよびコンテンツを開発することを目的としている。

近年高齢化により一人が複数の疾患を抱え、家族形態の変化により子どもを産み育てる世代も含めた全世代を対象とした支援が必要な時代になり、他方で看護師のコミュニケーションの能力の不足、殊に若い世代においては住環境の変化や科学技術の進歩等による人間関係の希薄化や生活体験の不足が指摘され、看護師基礎教育課程において多様な場（場面）での実践や多様で複雑かつ高い技術の修得が求められるなか、臨地実習は「保健・医療・福祉の様々な場面での実習を通じて、学生が患者や要介護者等の看護の対象者に直接接することが必須」[1]とされている。臨地だけでなく、その前後で行われる教育機関・施設でのシミュレーション教育や事例による教育も重視され、それぞれ教材等の開発が進められてきた。e-Learningの有効性も示唆され、一部教育機関・施設ではWeb上の仮想都市で病院や施設、家庭や地域で生活する人々への看護をも学ぶことができるようにまでになっている。

[2]そのなか、2020年度以降、COVID-19の影響により数年にわたって臨地実習の実施が困難となり、学内実習への切り替えや併用を余儀なくされた。一時期は学内での実習、既存の講義・演習も含め一切の対面での授業が困難となり、急遽オンラインを用いた遠隔での実施を求められた。そしてCOVID-19が５類感染症へと以降した現在、改めて臨地実習の意義が確認されるとともに、従来開発・実践されたシミュレーション教育をはじめとするコンテンツやプログラム等の状況[3]やそのなかで行われてきた実践、約３年の間蓄積した「臨時」対応下での実践から、実習の内容そして学内でのシミュレーション教育をはじめとする講義・演習科目での教育を見直す機会となっている。

本稿では、COVID-19の影響下、2022年度に学内実習の一部として行った実践を整理する。[4]現在

---

[1] 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会（2017）『看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～』p.５。

[2] 左居由美（2006）「看護技術教材としての　e-learning　導入の試み」『聖路加看護学会誌』６,pp.54-59、他。開発されたコンテンツ等の例として、看護過程シミュレーションアプリ「ほすぴぃ」（株式会社エス・エム・エス、2016）、講義・シミュレーション教育・臨地実習に続く「第四の看護教育」としてのオンラインコンテンツ「ミッションタウン」（福岡女学院看護大学、2018）がある。

[3] そもそも従来開発・実践されたシミュレーション教育をはじめとするコンテンツやプログラムの一部はあくまで臨地実習や対面での学内の講義・演習を前提としていたこと、e-Learningを中心に教育機関・施設や教授者のe-Learningを行うことのできる環境やICT関連技術に依存するものもあること、など。

[4] 本稿執筆に際し、個人が特定されないように配慮すること、そのうえで実施内容や感想等を抽出して本稿に引用することを約し、同意を得ている。

看護師基礎教育課程の学生の状況や求められていることに鑑み、十年来社会情勢や中高年のニーズなどから人々の「日常」のなかでブームになり、教科書でも一部掲載された「終活」をテーマに講義を行った。看護師基礎教育課程に広義の「終活」学習を取り入れ、看護師（職）の視点で検討し、とらえ直すこと、そしてそれを臨床の場に還元しようとすることに新規性、独自性、また学術的・社会的な意義があるものと考えている。今回は一つの実践にとどまるが、本稿を起点に、求められる看護師像の育成に加え、COVID-19と同様の状況を見据え、かつオンライン設備・環境や教授者のICT関連技術、その他の多様な準備・費用・人材の負担を最小限に抑える（特に授業直前）ことにも留意した、講義・演習科目の教育コンテンツ開発の一助としたい。

２．学内実習への「終活」導入経緯

2.1.看護師基礎教育課程学生を取り巻く状況

看護師は、従来病院に勤務する割合が高いものの、就業場所は医療機関に限らず、施設、患者をはじめとする対象個人の家（在宅）などへと拡がり、多岐にわたる。また、少子高齢化の進行、超高齢社会のなかでの地域医療構想の実現や地域包括ケアシステム構築の推進を背景に、訪問看護を含む介護分野での需要の増大等に伴う看護職員の需要の増大も推計され、多様な場・環境における適切な保健・医療・福祉を提供することがますます期待されている。さらに、看護師はこれらが展開されるなかで機関・施設内外の多職種連携（ケアチーム）の場において「患者の日常生活と患者を最も身近で知る専門職」であり、対象の多様な生活スタイルや文化等を理解することや、「さまざまな支援制度に通じ、必要な人材、必要なサービスを組み合わせて提供できる」連携・調整能力などが求められている。[5]そのため、看護師基礎教育課程においては、2020年10月、保健師助産師看護師学校養成所指定規則及び「看護師等養成所の運営に関する指導ガイドライン」が一部改正され、３年課程では2022年度入学生、２年課程では2023年度入学生カリキュラムより、地域包括ケアシステムについての学習が充実するよう構成要素及び卒業時の到達目標に追記されたほか、対象や療養の場の多様化に対応できるよう「在宅看護論」は「地域・在宅看護論」に名称変更され、地域に暮らす人々の理解とそこで行われる看護について学ぶことを強化し、内容を充実させることとなった。よって、現職の看護師のみならず看護師基礎教育課程にある学生の段階で、少なくとも①（成人・）老年や地域・在宅といった領域、該当する人々、②地域住民・機関や他職種などとの連携に資する病院、医療機関内外のさまざまな他職種・機関、その他地域の社会資源への理解をますます求められることとなった。

他方、看護経験者のキャリアをみると、近年、年齢が上がるにつれて介護老人保健施設等に勤務する者の割合が高まる傾向にある。また、退職の理由は自他のライフイベント・ステージが密接にかかわっていることが少なくない。そのため学生は、自分のキャリアについて、従来以上に看護師基礎教育課程修了後もしくは「看護師」取得後、病院をはじめとする医療機関、特定の専門領域のみならず、多様な選択肢（ルート、領域）があること、就業場所は最初の就職後、多かれ少なかれ病院をはじめ

[5] 北川公子（2018）「第３章　老年看護のなりたち」北川公子,他『系統看護学講座　専門分野　老年看護学（第９版）』医学書院、p.76。厚生労働省（2019）『看護基礎教育検討会報告書』p.３。

とする医療機関以外への異動や退職・転職の可能性があること、自分自身や周囲の他者のライフステージなどに伴うキャリアの「変更」可能性があることなどを考慮し、デザインしていく必要がある。

2.2.「終活」の現在

「終活」は、2009年、『週刊朝日』が連載コラム「現代終活事情」のなかで「終わりの活動」（「人生のエンディングを自分らしく迎えること。また、その実現を生前から考え、準備すること。」）[6]の意で提示した造語である。背景にはわが国の少子超高齢化、高齢者の長寿化、家族構造の変化などが挙げられるが、当初は、葬儀・墓についての知識を蓄えることや事前準備を行うことが中心であり、実践者は主に高齢者や病気や障害のある者やその家族ら（という印象を持たれるもの）だった。だが、一般社団法人終活カウンセラー協会が「終活」を「人生の終焉を考えることを通じて、自分を見つめ、今をより良く自分らしく生きる活動」と定義[7]し、その意義（できること）として一般社団法人終活協議会が①お金・モノ・コトの整理整頓、②万一の備えに向けた希望や考えの整理、③家族と自分の想いの共有、④やりたいこと、自分の想い、考えを再認識を挙げ、「終活」を「人生の最期を意識しながら『もしも』にそなえることで、限りある人生の時間を前向きに生きるための活動」であり、「自分の生きかたを見つめなおし再確認する時間を持つということ」「自分が大切にしている人たちに対する愛情表現」と示す[8]ように、広義には一部の特定の状況下に置かれた人による（のための）活動に限らず[9]、取り扱われるテーマもまた、健康・医療、介護、認知症、身元保証、社会保険・民間保険、相続、遺言、葬儀、お墓・供養、自分史などと幅広い。そのため、その後2011年の東日本大震災や近年のCOVID-19などもあいまって、現在では老若男女が関心をもち、多様な価値観、用途で行われるものとなってきている。また、高齢者福祉や権利擁護といった観点から、アイテムの一つである「エンディングノート」は近年地方公共団体をはじめとする公的機関からも多数発行され、自治体が関与しての地域住民への配付、「書き方セミナー」といったイベントの開催もみられるようになった。

とはいえ、「終活」から「死」が頭をよぎり、ネガティブなもの、暗いイメージを抱きうることは否定できない。また、遺言、相続、死後事務といった一つひとつに法や専門職・業者がかかわり、自分自身だけでなく身内も関係してくることなどから、０から10まで一人で検討し、備えるのは難しい。そのためか、「エンディングノート」は、用途を細分化、もしくは多様化させ、タイトルや色を工夫するなどして[10]、ネガティブさ、暗さを払拭する、明るく、前向きな、ポジティブなものにし、かつ補足説明も添えることで、取り組みやすいものになってきている。[11]

---

[6] 山口一臣編（2010）『わたしの葬式 自分のお墓 2010終活マニュアル』朝日新聞出版,p.３。
[7] 一般社団法人終活カウンセラー協会「終活とは」
[8] 一般社団法人終活協議会（2021）各種セミナー等資料
[9] そもそも「現代終活事情」でも、最終回では「死ぬための準備でなく人生を楽しむために」と説き、出版された書籍でも「人生の最後を考える」のは「よりよく今を生きるため」だと副題で明記していることから、造語からまもなくすでに広義での「終活」を提示していた。
[10] 用途を細分化したものの例として、コクヨの「ライフイベントサポートシリーズ商品」『もしもの時に役立つノート』がある。また、タイトルは「マイ・ウェイ」「マイストーリーノート」「未来ノート」などさまざまな名称で発行され、一部キャラクターとのコラボ商品もある。
[11] 広義には純粋にこれまでの人生を振り返り今後の人生を考えるという要素が含まれており、内容も当初の「死」を感じさせるものだけではなく多様化していることから、筆者の森は「終活」を（児童・生徒のキャリア教育・キャリアパスポート、学卒→就職時の就職につながる、大人の）キャリアデザインや、世代間コミュニケーションの媒体としてもとらえ、活用している。

以上、看護師基礎教育課程学生を取り巻く状況および「終活」の現在をふまえ、「終活」は、看護師にとって、看護師として多様な他者理解のため、専門的な知識・技術を高め、成長するため、また短期・中長期のキャリアを検討していくため、さらには看護師本人やその家族をはじめとする身近な他者のための日常生活から「もしものとき」のためにも、触れ、学ぶことは意義深いものと考える。

2.3.看護師基礎教育課程における「終活」

「終活」は、看護師基礎教育課程の教科書でも一部取り上げられている。例えば、「老年看護学」の「死に至るプロセスを整えること」のなかで、「元気なうちから、自分の死に対して考え、学び、準備したいという中高生のニーズ」からブームにまでなっている動き、取り組みとして提示されている。広義の「終活」に類する概念、取り組みとして、看護師基礎教育課程においては事前指示（アドバンスディレクティブ）や「人生会議」とも言われるACP（アドバンス・ケア・プランニング）、エンドオブライフケアなどが挙げられるだろう。自他の死、病気、その他「もしものとき」を契機に、「もしものとき」について、もしくは「もしものとき」のための取り組みであり、記述箇所により「意思を表出できないとき」、高齢者、急性期・終末期といった状況、医療やケアの側面を主としつつも、その目的は「生物としての終末期だけでなく、人生そのものを振り返って、その生きざまを本人・家族と共有しつつ、人生の大団円を過ごすため」[12]などとして、一部では広い観点で取り上げられている。また、エンドオブライフケアやその課題[13]に対し、看護師は、「病院や施設などで高齢者の最も近くにいる」存在として「安楽や尊厳のまもり手としての役割に対する期待は大きい」とされている。[14]

2.4.実施校の状況

A校は、B県（首都圏郊外）にあるC大学系列の３年制看護系専門学校である。一学年は40～70名程度であり、そのほとんどがB県から入学するが、一部は全国各地から入学してくる。地域の基幹病院でもあるC大学附属病院D[15]が隣接することもあり、実習の多くはC大学関連の病院にて行われ、卒業後は約７割がC大学関連の病院、２割強がその他病院等にそれぞれ就職し、約数%が助産師や保健師の教育課程へと進学する。

2020年度以降、他の教育機関・施設同様COVID-19の影響により学内外で対応を迫られ、2022年度もまた、臨地実習の一部が学内実習に代替された。３年生が６月下旬から７月にかけて高齢者施設での実習を予定していた「老年看護学実践実習」は、臨地実習とあわせて目的・目標[16]を達成できるよ

---

[12] 北川公子,他,同上,p.348。

[13] ①老年期の発達課題にもあるように、死に対する見方を深め、人生の終結に向かう過程をより豊かにするための支援、②近い将来の死が不可避となった時期に、心身ともに苦痛がなく、尊厳をおびやかされることなく死が迎えられるようにするための支援

[14] 同上,p.76。

[15] Ｃ大学附属病院の一つで、政策医療の中でも特に救急医療ならびにがん診療、高齢者医療などを積極的に推進し、地域の基幹病院としての役割を果たす。

[16] 【実習目的】高齢者、家族の生活および健康の特性を理解し、健康レベルや療養形態に応じた高齢者と家族に対して適切な看護を実践できる基礎的能力を養う。
【実習目標】地域社会で生活する高齢者の生活機能を支える看護の役割が理解できる。
１）介護保険法に基づく施設の機能が述べられる。２）高齢者の生活の実際を通じ、生活機能を支える援助の必要性が述べられる。３）認知症高齢者の特徴を踏まえ、援助の在り方が述べられる。４）高齢者の終末期における援助の在り方が述べられる。

う、老年看護学担当のH教員が中心となって学内実習を検討することとなった。

他方、筆者の森は、従来担当科目を軸とした専門職養成、多職種連携教育、キャリア教育等と並行し、地域住民への「終活」の啓発・促進・サポート活動に尽力している。[17]A校では、2020年度より非常勤講師として２年次科目「社会福祉（専門基礎分野）」（２単位）を担当し、[18]「終活」や「エンディングノート」の紹介、体験活動の時間を設けている。そのなか2022年春、３年次学生がH教員に授業の内容の一部をかつて「社会福祉」で触れたことを伝えたことを機に、H教員らの依頼により、「老年看護学実践実習」の学内実習の一部で「終活」を取り扱うことが決定し、90分間の特別講義（事例・体験等で想定する高齢者は「入院にて治療をしている方ではない生活支援レベル」）を森が担当することとなった。

３．「老年看護学実践実習」特別講義実施概要

教材は、当日使用するスライド資料のほか、複数種類の「エンディングノート」、「終活」関連の雑誌を用意した。教材を含む当日の内容は、実習を想定し、学生のリアルな反応や授業中の学び直後の対応（実践）をみることを目的に、少なくとも森からは「終活」というテーマを伝えるにとどめ、その他は授業中に初めて提示した。題目は「これからの『シューカツ』[19]を考える」とし、講義を通して「終活」の概念、価値観、実際の活動は時代やニーズなどにより変容することをとらえ、看護師を目指す者としても私人としても、講義のなかで見聞きした事実や状況一つひとつに対して「考える」ことを意識し、実践につなげること、それらを講義後も継続してもらうことをねらいとした。なお、本講義は他の実習等との都合により40名を３組に分け、十数名ごとに実施した。まず講義形式で①「シューカツ」（「終活」）とは？（「終活」のはじまり、変遷、定義、意義（できること））、②エンディングノートからみる「シューカツ」の現在、可能性、③障害のある人に対する意思決定、伝達時の配慮をとらえ、[20]その後エンディングノート作成を体験（主に医療・介護面）、授業後、実習日誌とは別に特別講義単体の振り返り（気づき、学びなどの記入）を行うこととした。

ちょうど１年前、D病院での臨地実習前後に実施した「社会福祉」の社会保険、特に医療・介護・年金保障の授業のなかで、D病院によるACP関連の取り組みとともに「終活」や「エンディングノー

---

[17] 特別なことではないが、実践において、森は下記①～③のようなことに重きを置いている。また、筆者の矢野は他の教育機関の看護師基礎教育課程で「社会福祉」を担当するほか、ソーシャルワーカーおよび保育士養成に尽力しており、背景には福祉・介護の現場での実務経験とそこでの学びがある。森は授業計画やコンテンツ作成等において、矢野の実務経験者、ソーシャルワーク専門職としての知見を一観点として活用している。
①これまで～これからの科目・学び、人の日常生活、ライフイベント・ステージと結びつけること
② ①により、本科目をはじめとする講義・演習・実習を、看護専門職を志すものとしてだけでなく自分自身、家族、地域、各専門職などと結びつけ、「我が事」と感じてもらう。多様な観点で学び、気づきを得てもらう。
③学校内外、例えば家庭、地域、職場（実習現場）で専門職をはじめとする他の社会資源に目を向け、各一員として（学校や職場以外では、各一員「＋看護師資格保有者」として）連携に寄与する存在、社会資源や連携を常に意識できる存在になってもらう。

[18] 2022年度以降は、加えて１～２年次のキャリアデザイン関連科目も担当

[19]「終活」は、「終=死」とは限らないこと、「終活」は時代やニーズなどにより異なること、これらに加え、高齢化の先進国として国外で注目されていること、一方で「終」の英訳は「end-ing」と「終わり」の意を強く解釈され得ることから、当初の目的・内容から多様化したことを強調し、幅広い意味を包含する国際通用語として、新たに「シューカツ」と提示した。

[20] 意識的に関連する単元・科目名を出したり過去の授業で用いられたスライドを改めて提示したりすることで、過去２年間で学習した講義科目との接続を意識してもらうように心がけた。

ト」に触れた際は、それらの目新しさからか、「終活」の具体的な媒体、内容を「エンディングノート」という実物を通して提示され、短時間でも体験したためか、振り返りからは「エンディングノート」への関心の高さ、そのうえでの「我が事」、看護への応用としての気づき[21]が見受けられた。

そして今回、振り返りにおいて、本講義を受けての今後の行動という観点では引き続き「エンディングノート」に関するものが多く見られたが、１年前の授業や日常生活を振り返ったり直前に控えた実習を見据えたりしながら、「祖父母」（「祖父」「祖母」）、「家族」、「入院される患者」などと対話をしたり使用したりする対象、「終末期」をはじめとする使用場面などが、公私双方の部分でより具体的に記された。また、気づき・発見・学び、その他感想等では、社会的背景、「終活」に関心のある人・実践者の変遷から終活の各活動に至るまでさまざまな観点での考察や、「今」の自分にできることを公私でみつめる姿など、より深い学び、分析が行われていた。

４．まとめ・今後の展望

今回、１種類、40名での実践だったが、一年という学びや経験を経て、それらを公私の自分、社会等と結びつけた更なる学び、それらをふまえさらに前に深く進む姿が見受けられた。今後は、他の教員や実習指導者らと協力のうえ、他の場面での応用や学びの成果も含め分析していく。

その際、あわせて「終活」に対する教員自身の気づきや学び等にも注目することとする。本稿では割愛したが、本実践の過程ではH教員にも大きな動きがあった。[22]また、後日H教員の呼びかけにより、B県にある専門学校で老年看護学を担当する教員組織のなかで「終活」研修が企画、実施された。さらに、本研修においてH教員は参加教員に事前・事後に聞き取りを行い気づきを得ていたが、聞き取り結果に筆者もまた、老年看護学担当の教員が「終活」を学ぶ余地のあること、教育活動に反映させることができ得ることを示唆した。

よって今後は、基礎教育課程教員間で連携し、さまざまなニーズに応じた学生・教員双方のコンテンツ開発の拡充に努めていきたい。

---

[21] 例として、以下のものが挙げられる。
a エンディングノートだけでなく人生の設計図を立てると自然とエンディングノートにも繋げられるということ
b（エンディングノートを）死ぬ前に自分１人で書くのは難しいと感じた。
c エンディングノートをやって、終活を行うにもどういう自分でありたいのか、また家族にかかる負担、終活をする上で関係する法律の理解ができていることで人生の最期の生活の質も変わってくるのかなぁと感じた。
d エンディングノートの存在については知っていたが、どのような内容か知らなかったので頂けて嬉しかった。書いておくと、患者さんにもしものことがあったときに家族が患者さんの意見を尊重した対応、介護ができると思うので素敵なものだと思った。

[22] ３回の実践を通して学生と一緒に「終活」を学び、他の教員と「終活」や「エンディングノート」について話すほか、スライド資料で紹介した映像コンテンツを学生に視聴させる時間を設けるといった学内実習内外の教育活動への反映がみられた。

引用・参考文献

ⅰ．左居由美（2006）「看護技術教材としての　e-learning　導入の試み」『聖路加看護学会誌』６,pp.54-59。

ⅱ．山口一臣編（2010）『わたしの葬式　自分のお墓　2010終活マニュアル』朝日新聞出版。

ⅲ．大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会（2017）『看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～』

ⅳ．北川公子,他（2018）『系統看護学講座　専門分野　老年看護学（第９版)』医学書院

ⅴ．厚生労働省（2019）『看護基礎教育検討会報告書』

ⅵ．一般社団法人終活協議会（2021）各種セミナー等資料

ⅶ．厚生労働省（2022）『令和４年版厚生労働白書』

ⅷ．第２回看護師等確保基本指針検討部会（2023）『資料２　看護師等（看護職員）の確保を巡る状況に関する追加資料【第１回検討部会（令和５年５月29日）の議論を受けた追加資料等】』

ⅸ．一般社団法人終活カウンセラー協会「終活とは」（https://www.shukatsu-csl.jp/about_shukatsu（最終閲覧：2023/12/22））

ⅹ．厚生労働省「『人生会議』してみませんか」（https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_02783.html（最終閲覧：2023/12/22））

ⅺ．株式会社林商会（2019）「20～70代の150名に大調査！世代別終活への意識調査」（https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000015.000078741.html（最終閲覧：2023/12/22））

ⅻ．楽天インサイト「終活に関する調査」（2019-2023）